

「フィリポ 懐疑の人」

2014年06月02日

ユダヤ人であったフィリポはギリシャ名を通しています。両親がギリシャ文化に傾倒し、子どもにギリシャ名を付けたのではないのでしょうか。当時の世界を席卷していたギリシャ・ローマ文化は現実を正確に把握し、理性的、合理的に対処する能力を評価するものでした。フィリポはギリシャ・ローマ文化の中で育った人と思われま

す。主イエスの周りには、抑圧された民衆が主イエスの言葉と業を求めて群がっていました。押し寄せて来る飢えた群衆を見て、主イエスはフィリポに「この人たちに食べさせるには、どこでパンを買えばよいだろうか」と試みの問いを出します。フィリポは「めいめいが少しずつ食べるためにも、二百デナリオン分のパンでは足りないでしょう」と5千人ほどいた群衆を数え、必要なパンの金額を即座にはじき出します。現実を正確に判断できる能力を持っています。現実を正確に判断できる人は、フィリポが「足りないでしょう」と言っているように、否定的な答えを導き出します。「これではダメです」。信仰は現実を認めながらも「望み」に生きることです。フィリポには望みが無いから、事柄を否定的、懐疑的に見てしまいます。この時、アンデレは「五つのパンと二匹の魚があります」と突拍子もない申し出をしました。その申し出が顧みられ、飢えた群衆は食べて、満腹する祝福に与っています。

物見遊山に、ギリシャ人がイスラエル最大の「過越祭」を見ようとエルサレムに向かっていました。すると、主イエスのうわさで持ち切りです。興味を持った彼らは、ギリシャ名を持つフィリポに頼み易かったのでしょうか、彼に紹介を申し出ます。当時、異邦人は汚れているとみなし、口も利かない習わしでした。フィリポは、主イエスはギリシャ人に会ってくれるだろうかと迷います。そこで、友人のアンデレに相談します。アンデレは、主イエスは人を差別しないと、躊躇なくフィリポを引き連れ、主イエスにギリシャ人の面会要求を伝えます。フィリポは、現実だけを踏まえますから、迷い、懐疑から抜けられないのです。

最後の晩餐が行われた夜、主イエスは十字架の死を決意して、弟子たちにお別れの長い説教をしています。その中で、「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。あなたがたがわたしを知っているなら、わたしの父をも知ることになる。今から、あなたがたは父を知る。いや、既に父を見ている」と語りま

す。するとすぐ、フィリポが「主よ、わたしたちに御父をお示してください。そうすれば満足できます」と求めます。主イエスは十字架で死に、復活して、神と人とを結びつける道をつける。その道を通して父のもとに行く。そして、私を知り、私を見た者は父を知り、既に父を見ていると言われたのです。フィリポは父・神を見たと聞いて「いいえ、まだ、見ていません。見せてください。そうすれば満足します」と具体的に見ることを要求しています。いかにもフィリポらしい言葉です。彼は、見えない世界を信じられない。見える世界が全てであると思っていたのです。

フィリポの現実主義、そこから生まれる懐疑主義は現代人の姿、思想そのものです。フィリポの懐疑を超えて、主イエスの「わたしが父の内におり、父がわたしの内におられることを、信じないのか」という言葉、即ち「主イエスに神を見る」ことにキリスト教信仰はかかっています。